

研究テーマの見つけ方

－自分は今、どこにいて、なにをしたいのか－

思考を拡散させて、研究をしてみたいという興味・関心のあるテーマが複数浮かんできたら、早速、それらの中で一番興味のあるテーマを研究テーマとして設定して研究を始めようとしがちです。もちろん、持ち前の実践力を発揮して研究を進めていける人には無用な心配ですが、若手研究者の中には途中で躓いて立ち止まってしまう人が少なくありません。結果として、「自分がなにをしているのかわからない」という事態に陥ってしまいます。

そうした事態を避けるためにも、興味・関心のあるテーマを拡げるだけにとどまらず、深める作業もしておきます。具体的には、興味・関心のあるテーマを取り上げて、なぜそのテーマに取り組んでいきたいかを自問自答を繰り返します。得られた回答に「なぜ」と問い、またその回答に再度「なぜ」と問う、という形で自分の回答が尽きるまで繰り返します。こうすることで、自分がなぜその研究をしたいのか、自分自身の「研究アンカー」を位置づけることができます。この「研究アンカー」は、研究を進めていった時にたとえ「研究迷子」になったとしても、そこから救い出してくれるだけでなく、研究テーマに1本筋を通してくれることにもつながるでしょう。

この作業がなかなか進まないテーマもあるかもしれません。しかし、拡散させた複数の興味・関心のあるテーマを対象にすると、それだけ自問自答して回答を見出すことは可能です。また、全く異なるテーマだと思っても共通の回答にたどり着き、それが「研究アンカー」と自覚できる場合もあるでしょう。

この作業と同時並行的に、もしくは、行ったり来たりしながら、もう少し興味・関心のあるテーマを深めておきたいと思います。具体的には、そのテーマで疑問に思う現象を設定して、1) その現象は「どうして」起こるのか、また、2) その現象は「なにを」引き起こすのか、3) その現象を「どうしたら」解決することができるか、を上で述べた方法と同様、自分の回答が尽きるまで繰り返します。これはいわゆる「ロジックツリー」を作成することになるのですが、1) は現象を引き起こす原因を、2) は現象によって引き起こされる結果を、3) は現象に対する介入方法を、抽出することで、それらの要素をもとに「研究マ

ップ」を準備しておきます。その際、自分の専門分野にどうしても偏ってしまい、たとえば私であれば、「心理学」の要素をもとにマップを作りがちですが、あえて他分野の要素も入れておきます。興味・関心のあるテーマ1つをとっても、たくさんの研究テーマが設定できるため、そうすることで、今後様々な情報が入ってきたときに、自分が取り上げたいと考える研究テーマの立ち位置を理解することが可能になります。

なお、この作業を行うことは、現象を因果関係で理解する練習にもなります。また、一度言葉にしておくことで、関連する情報へのセンサーが敏感になり、必要な情報を集めやすくなります。

これらの作業で得られた「研究アンカー」と「研究マップ」は、確かに主観的な色合いが強く、そのまま研究テーマとして設定することはできないでしょう。しかし、実際に継続できる研究テーマを見つける道具としては、転ばぬ先の杖として非常に役立つはずです。なによりも重要なのは、回答が尽きるまで考えたことを研究ノートなどに言葉にして残しておくということです。そうすることで、たとえ「研究迷子」になったとしても、自分が今、どこにいて、なにをしたいのか、俯瞰的にそして視覚的に自覚できるでしょう。

(駿河台大学 杉本英晴)